

ネオリベリズムから復古主義へ

— 不毛なイデオロギー論争

それにしても大統領辞任をめぐる騒動はお粗末に尽きる。もともと国家元首を法令署名マシンと考えたことが間違いだった。シュミット・パールに法律を判断する知識も能力もなく、知的水準も高いとは言えないことを承知で大統領に任命し、それが暴露されて辞任に追い込まれたのだから、オルバン FIDESZ 党首の責任問題であることは間違いない。しかし、今の FIDESZ では党首の責任問題にならないところが、この政党のもつ最大の強みで、かつ最大の弱点だろう。そういう議論すら起きないのだから。

シュミット大統領についてはハンガリー語の正字法の初等的間違いが何度も指摘され、そのたびに元首としての資質が話題になった。その挙句の果てに、大学博士（小博士）取得論文がブルガリアの学者の書物を丸写ししたものと暴露されてしまった。ブルガリア語からフランス語に翻訳された書物をハンガリー語に引き写したと断定されているが、もちろんシュミット自身が翻訳したものではなく、彼に代わって誰かが翻訳したものをそのまま博士号請求論文として提出したのだ。剽窃と代筆の二重問題なのだ。アメリカでは学位を売る怪しげなビジネスも存在する。旧体制下の小博士は政治的な意味合いも強かっただろうし、体制転換直後の学位審査も甘かっただろう。しかも、スポーツ分野の論文となれば、審査もさらに甘くなる。シュミット大統領だけの問題だとは誰も思っていないが、国を代表する元首が盗作となると、やはり即時辞任しか道は残されていなかった。

日本でも漢字が読めない首相がいたからシュミットを貶めようとは思わない。しかも、小博士は学術博士ではないから、厳密な学術審査を受けない類の学位だ。しかし、外国人にはハンガリーの学位の仕組みは分からないから、肩書きに博士とつけば外国ではそれなりの待遇を受ける。中身の乏しい人ほど、肩書きに頼らざるを得ないから、同情を禁じ得ないが。

責任をとらないハンガリーの政治家

本来であれば、最初に論文剽窃が暴露された時に、即座に大統領を辞任すれば、これほどまでに FIDESZ の失態となることはなかった。ところが、オルバン首相もシュミットも FIDESZ 首脳もメディアの批判を過小評価した。議席の三分の二をとった傲慢が事態を見誤らせた。

体制転換以後、首相や大統領の政治家のトップの不祥事が暴露された事件は何件かある。2002 年に首相に就任したばかりのメツジェシ・ピーテルが旧体制下の諜報部員だったことを暴露された事件では、結局のところ、メツジェシは辞任することなく首相の座に居座った。同様の事件が 1996

年にポーランドでも起きたが、その時には即座にオレクシー首相は辞任したが、ハンガリーでは見過ごされた。これほど体制転換のハンガリー的特質を如実に示す事件はない。旧体制のトップ官僚や政治家の過去を曖昧にしたまま旧体制からの漸次的体制移行を行ったハンガリーでは、過去の決別が曖昧にされてきた。連立パートナーの SZDSZ はそれを容認するのと引き換えに、ネオリベラリズムの政策を社会党に押し付けた。そこからハンガリーの政治が複雑に絡まりだした。

SZDSZ が政治手法で対立したメジェッシを見限った結果、政治の舞台に登場したのがジュルチャーニイである。彼もまた、旧体制の人脈を利用して申し上がった野心的な政治家だが、政策的には SZDSZ のネオリベラリズムに同調するかたちで社会党を率いた。口では「左翼」をととなえ、政策と行動では「右翼」的な方向に進むという矛盾した行動は、社会党が少数政党に陥落した後に、最終的に社会党から離脱することで決着が図られた。ジュルチャーニイは今、旧 SZDSZ 勢力やそれに同調する旧社会党勢力を率いる政党の党首になっている。ジュルチャーニイの事例が示していることは、左翼や右翼というレッテル張りが現代ではまったく意味をもっていないことである。最初から右や左の矛盾は存在せず、ジュルチャーニイを含めた政治家の行動を支えるものは、オポチュニズム（日和見主義）に過ぎないのだ。

メジェッシの後を継いで首相に就任したジュルチャーニイは、2006 年の総選挙の選挙戦で国家財政赤字を意図的に小さく公表し、選挙後に本当の赤字率を明らかにするという世論操作を行った。これが 2006 年秋から始まるブダペスト騒乱の始まりである。明らかに虚偽の数値を公表し、国民を欺いた責任を取るべきだったが、社会党-SZDSZ 政権は首相や大蔵大臣の責任を不問にした。

このように、ハンガリーでは政治家のトップが責任をとるという倫理や規範が確立されてこなかった。だから、オルバン首相もまた、シュミットの論文偽造程度のことで責任問題が発生するなどと考えもしなかったのだ。権力さえ握れば、なんでも押し通せるというのが、ハンガリー政界の常識だったのだ。

政治か学問か—苦しい選択を迫られた知識人

シュミット大統領の博士論文偽造問題が公になってから、FIDESZ を支持する知識人たちは非常に苦しい選択を迫られた。オルバン首相は「偽造問題は FIDESZ にたいする政治的攻撃」だとし、それに妥協することは許されないという態度をとったからである。他方、いくら FIDESZ を政治的に支持するとしても、学者として譲れない基本線がある。

学者の世界で論文剽窃が明らかになれば、学者としての生命を失う。大学教員であれば辞任問題に発展する。だから、学生にたいしても、コピペが許されないことを口酸っぱく諭す。もっとも、ほとんどの学生は学者になるわけではないから、そういう説教は馬の耳に念仏だが。

シュミット博士論文偽造が明らかになってから、多くの政治家が自らの卒業論文や小博士論文を

大学の図書館などからこっそり持ち出し隠している。ジュルチャーニイの卒業論文も「誰か」が持ち出して、行方不明になっている。もっとも、卒業論文まで対象にしたら、実も蓋もないだろう。

博士論文偽造がメディアを賑やかし始めてから、シュミット論文の再審査要求が叫ばれ始めた。しかし、すでに博士号を出した体育大学はセンメルワイス医科大学に統合されてしまっている。とすると、医科大学が再審査を行うべきなのか、それとも科学アカデミーが行うべきなのか、それとも教育省が指示することなのか。教育省の管轄事項ではないし、科学アカデミー総裁のパーリンカシュは「小博士は大学が授与する学位だから、学術博士号を授与するアカデミーに関係がない」と突き放した。

センメルワイス大学学長は **FIDESZ** を支持する知識人として知られているが、教授陣から「大学の名誉を守るために、再審査を行い、判断を下すべきではないか」という意見が多く寄せられ、再審査委員会が設置された。多くの国立大学では外国からの留学生を多数受け入れており、大学の評判は大学の教育レベルを比較するランキングにも影響する。盗作が明らかになっても学位がはく奪されないことが喧伝されるのは大学にとって致命的だ。だから、政治と学問を区別すべきという真つ当な判断が下されたと言える。3月の最終週にセンメルワイス大学の委員会の報告（「シュミット大統領の博士論文はそのほとんどが引き写しである」という結論）が審査委員会で採決された。大学評議会でもこの結論が承認され、「シュミット大統領の博士号の無効」が決議されたのである。

政治家の傲慢

ここまで窮地に追い込まれても、シュミット大統領はなおその座に執着した。オルバン首相の後押しがあったのかもしれないが、これほど事態が悪化しては為す術がなかった。**FIDESZ** 政治家のなかでも、これ以上の大統領の座への執着は有権者の **FIDESZ** 離れを惹き起こすと主張する者が多くなったが、それでもオルバン首相の取り巻き連中は学者を政治的に押さえつけることができると信じていた節がある。

とくに国会議員団長のラーザル・ヤーノシュは、シュミット辞任演説の後の国会演説で、学者世界を批判する言動を行った。「学者は政治家を批判し、断罪する資格があるのか」というような主旨の発言を行っている。**FIDESZ** の傲慢を地で行くものだ。パーリンカシュが語ったように、シュミット大統領の博士論文は擁護できる余地がまったくない代物で、論文でもなんでもないとことなのだ。そういうお粗末さを指摘されて、なお数か月も大統領の座に居座る神経や知力が問題とされていたのだ。どう考えても、政治力によって擁護できる問題ではなかった。ところが、**FIDESZ** の政治家は最後まで、政治力でこの不祥事を抑えつけられると考えていた。まさにこの政治と学問の混同こそ、共産党独裁下の旧体制社会の問題だったのではないか。三分の二の支持を得ている **FIDESZ** だから混同しても良いというのはあまりに幼稚な議論だ。このような小児的議論が知識人

に嫌われていることが、理解できないのだ。

FIDESZ の「三分の二絶対多数の傲慢」がシュミット辞任を遅らせた。問題の処理が遅れた分だけ、FIDESZ は大きな痛手を被った。そのことを一番悔いているのはオルバン首相かもしれない。しかし、「事の本質は FIDESZ への攻撃、つまり自分への攻撃」ととらえている限り、オルバン首相率いる FIDESZ が、傲慢を克服することはできないだろう。

復古主義への回帰

FIDESZ への熱狂的支持が冷めていくとしても、離反した有権者が野党の支持に向かう訳ではない。それは日本と同じ。政党・政治不信層が増えるだけで、ハンガリーの政治は FIDESZ に代わる政党に期待を寄せるという状況にはない。しかも、FIDESZ 支持の知識人の多くはオルバン首相の愛国主義路線を依然として支持している。そこにも、ハンガリーの体制転換の複雑な事情がある。

大学教員の多くが FIDESZ 支持者になってきたことにはそれなりの理由がある。FIDESZ 支持の教員の多くは、社会党—SZDSZ の政権が続いたために、ハンガリーの教育や社会の結束力が崩壊したと考えている。この認識は正鵠を得ているとは思わないが、SZDSZ が推進した自由主義的教育が教育を崩壊させたという意識をもっている人は多い。学校内の規則や規律の維持、生徒の行動の自由、教員の教育姿勢などが限りなく緩められた結果、ハンガリーの教育は最低限の水準まで低下し、ハンガリー社会の結束力が緩んだと考えている。

筆者は教育を含めたハンガリー社会の社会規範や倫理が限りなく緩んできた根本原因が、旧体制の支配のあり方と密接に結びついていると考えている。長期にわたったカーダール政権は体制に反対しない限り、労働者や国民に最大限の譲歩を与えるという姿勢をとり続けてきた。それが社会規範の弛緩をもたらしたと考える。教育に始まり、労働者やホワイトカラーの労働倫理、公務員の仕事ぶりから国民の日常生活に至るまで深く根付く社会全体の規律や倫理の弛緩を結果した。ここ二十数年の体制転換の結果というより、ハンガリー社会主義政権 40 年の負の遺産だと考えるのが妥当である。そして、社会党—SZDSZ 政権は旧体制の社会規範の弛緩を、市場原理主義的な自由主義で克服できると考えたという意味では、社会党主軸政権が旧体制の負の遺産を克服できなかったばかりか、逆にさらに弛緩させたと考えることもできる。その点に限れば、FIDESZ 支持者の理解は間違っていない。

他方、この問題を愛国（民族）主義で克服できると考える FIDEZSZ の発想も貧弱である。市場経済をベースにした新しい倫理や規範が必要なのに、それを飛び越して、復古主義に回帰するのは時代錯誤である。しかし、日本でも天皇を頂点に据えた君主国家を夢見る御仁たちが多くいるから、復古主義への回帰はどここの国でも見られる現象だと言える。その点では、将軍様を祭り立てる政治を行っている北朝鮮を嘲笑できるほど、日本社会の文化的開明度が高いとは思われない。君が代斉

唱の口元監視など、戦前の天皇制国家の教育そのものではないか。

(関連する分析は、<http://morita.tateyama.hu> を参照されたい)